

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00880

研究課題名（和文）英語学習成果に対する学習者の自己効力感の影響：横断研究及び介入研究による実証研究

研究課題名（英文）An effect of academic self-efficacy on English learning: cross-sectional and longitudinal studies

研究代表者

横山 悟（Yokoyama, Satoru）

埼玉大学・教育機構・教授

研究者番号：20451627

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、MSLQを用いた自己効力感の値が、英語学習の成果と統計的に相関があることが示された。これらの結果は、海外での結果と類似の結果が得られたことから、日本でも海外と同様、環境が異なる状況においても、英語学習における自己効力感の影響がある、ということを示している。一方、本研究結果からは、学習における自己効力感は、直接関与する学習内容のみに影響するものである一方、直接関与しない学習内容に対しては、転移効果のようなものはない、という可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果より、英語学習において高い学習成果を生じさせるためには、モチベーションとしての自己効力感の影響をより重視する必要があることが示された。学習方略による効率性を求めるだけでなく、モチベーションという学習者の感情的な側面も考慮して、教育を行っていく必要性を、教育者は考えていかなければならないことを、本研究結果は示唆している。

研究成果の概要（英文）：The current study showed that self-efficacy values using the MSLQ were statistically correlated with English language learning outcomes. These results are similar to those obtained in other countries, indicating that self-efficacy in learning English is affected in Japan, as it is in other countries, in situations where the environment is different.

On the other hand, the results of this study suggest the possibility that self-efficacy in learning only affects the learning content in which one is directly involved, while there is no such effect as a transfer effect for learning content in which one is not directly involved.

研究分野：学習心理学

キーワード：英語学習 自己効力感 モチベーション 学習成果 横断研究 介入研究

### 1. 研究開始当初の背景

現在、高等教育における学生の学習成果に関する研究は全世界的に行われている。特に近年着目されているのが、自己効力感の影響である。自分に対して「自分はやればできる」と思っている(自己効力感が高い)学生ほど、個別の科目の学習成果が高かったり、大学卒業時の成績が高かったり、卒業後の年収が高かったり、といった結果に繋がっていることが示されている(例えば Robbins et al. 2004)。

しかしながら、日本でのデータは最新の review article にも含まれておらず、研究自体が進んでいない(Honick and Broadbent 2016)。特に、一般的に日本人は欧米などと異なる気質を持つ可能性もあることから、欧米を中心とした今までの先行研究での知見とは、異なる結果が得られる可能性もある。よって、日本における「学力」への「自己効力感」の影響についての研究が必要である。

さらには、先行研究における「学力」として、多くが物理学や心理学など、計算や知識などを問う科目を対象とするものが多い。一方、外国語教育や英語教育などの、言語系スキルに関する科目を対象とした研究は少なく、review article における因子として取り上げられることもなかった(Honick and Broadbent 2016)。

日本においては、英語学習における自己効力感の影響についての報告は複数あるものの(例えば山口・堀 201) 英語の学習成果自体と自己効力感との関係性に関する研究、及び自己効力感の向上が英語力向上に繋がるか、といった直接的な介入研究は見当たらなかった。

また、ある科目における「学力」への「自己効力感」の影響に対し、直接的な因果関係を検証することが可能な長期的な介入研究も複数行われているが(例えば Putwain et al. 2013 など) ある科目において「自己効力感」の向上に対する介入を行い、その結果が他の科目の「学力」の向上に転移するか否か、という研究は、本申請者が探した限りでは見当たらなかった。

以上を踏まえ、本研究における「学術的な問い」は、以下の2点とした。第一に、欧米等先行研究との方法論を揃えた上で比較できる、日本における「学力」への「自己効力感」の影響があるのか否か、第二に、英語という単一の科目での「自己効力感」向上による「学力」向上の効果を確認した上で、その効果が他の科目へ転移するのかどうか、である。

### 2. 研究の目的

上記の学術的な問いに基づき、本研究の目的は以下の2点とする。

1. 先行研究と比較できる方法論に基づいて、日本における「学力」に対する「自己効力感」の影響を明らかにする

2. 英語学習での「自己効力感」の向上介入による他科目への転移効果の有無を検証する

学術的独自性及び創造性としては、日本国内において、先行研究と直接肩を並べて比較ができるだけの研究が見当たらず、review article に選定される研究が皆無である、という状況を打破するための研究を目指す、という点が上げられる。

さらには、先行研究においては単一科目における「学力」への「自己効力感」の影響を明らかにしようとしているが、本研究では、単一科目以外への直接的な転移効果を調べようとする longitudinal な介入研究を行うという点で、今までの先行する知見に新たな観点からの知見を加えることができると考えている。

### 3. 研究の方法

本研究では第一段階として、欧米系での先行研究がほとんどを占める状況で、日本における結果が欧米等の結果と一致するものなのか、それとも異なるのか、について、高等教育における英語教育を研究対象として、確認を行う。

第二段階として、英語教育の環境の中、自己効力感を向上させる学習介入を行い、英語教育自体に学力向上効果が見られるのかどうかを確認し、加えて英語以外の科目においても学習成果の向上効果が見られるか否かを検証する。

よって本研究では、上記の二段階による実証研究を行う。全体の計画としては、第一段階は、初年度に準備を進め、二年目までに収集、分析を終える。二年目及び三年目に第二段階の準備を始め、四年目に介入実験を行い、五年目を最終年として、データの分析及び成果発表を行う。

第一段階：高等教育での英語教育における、「英語学習成果」への「自己効力感」の影響

研究目的は、「学力」への「自己効力感」の影響を明らかにすることであり、特に日本における結果が欧米等の結果と一致するものなのか、それとも異なるのか、について、高等教育における英語教育を研究対象として、確認を行うことである。

研究方法は、主に欧米で用いられている「自己効力感」に関するテストバッテリーを援用し、

直接比較できる形を整える。最も多く用いられているものは、the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ)であるため (Honicke and Broadbent 2016 参照) これを日本語訳したものを使用する。「学力」に相当するデータとしては、先行研究では自己報告による総合平均 GPA、及び各科目の単位評価スコア、などが用いられている。第一段階のデータとしては、欧米での横断大規模データとの比較を行うため、実際の総合平均 GPA、及び英語科目の単位評価の双方を準備、使用する。

最終的に、各学生の「自己効力感」に関するテストバッテリーのスコアと、総合平均 GPA、及び英語科目の単位評価との間での相関関係を調べる。

第二段階：自己効力感を向上させる学習介入が英語教育自体、及び英語以外の科目に学習成果の向上効果が見られるか否かを検証

研究目的は、英語教育の環境の中、自己効力感を向上させる学習介入を行い、英語教育自体に学力向上効果が見られるのかどうかを確認し、加えて英語以外の科目においても学習成果の向上効果が見られるか否かを検証することである。

研究方法は、本申請者が担当する英語科目のクラスにおいて、「自己効力感」を向上させる方略を用いて学習介入を行う。「自己効力感」を向上させる方略としては、Bandura (1997)において示されている、スキルの習得経験を積ませること、言語的な励まし、他人の成功体験の観察、を援用する。これらは実際に、「自己効力感」の向上に効果があると報告されている (例えば Margolis and McCabe 2006)。対照群として、「自己効力感」の向上方略を直接的に使用しない英語科目クラスを設定する。

この学習介入の導入に対し、介入前後の「自己効力感」のテストバッテリースコア、英語科目の単位評価スコア、及び、同期の他科目の単位評価スコアを収集する。最終的に、「自己効力感」の向上に対する学習介入を行った群と行っていない群とで、「自己効力感」のスコア、及び成績に関するスコアの比較を行う。

#### 4. 研究成果

結果として本研究では、MSLQ を用いた自己効力感の値が、英語学習の成果と統計的に相関があることが示された。これは横断データ、及び介入データ、双方にて相関があることが示された。これらの結果は、海外での結果と類似の結果が得られたことから、日本でも海外と同様、環境が異なる状況においても、英語学習における自己効力感の影響がある、ということを示している。

一方、自己効力感を向上させる学習介入が英語教育自体、及び英語以外の科目に学習成果の向上効果が見られるか否かを検証した結果については、英語学習に対しては効果が見られた一方、英語以外の科目には統計的に有意な影響は見られなかった。よって本研究結果からは、学習における自己効力感は、直接関与する学習内容のみに影響するものである一方、直接関与しない学習内容に対しては、転移効果のようなものはない、という可能性が示唆された。

これらの結果より、高い学習成果を生じさせるためには、モチベーションとしての自己効力感の影響をより重視する必要があることが示された。学習方略による効率性を求めるだけでなく、モチベーションという学習者の感情的な側面も考慮して、教育を行っていく必要性を、教育者は考えていかなければならないことを、本研究結果は示唆している。

また本研究では、オンライン学習が部分的に導入されていたこと、及びコロナの影響によりオンライン学習へと強制的に社会が移行を余儀なくされたこと、といった背景から、オンライン英語学習における自己効力感の影響が、本研究を含む、対面の通常授業における影響と違いがあるのか、あるとすればどのように異なるのか、についての研究へと発展させていくため、最終年度で本研究は廃止され、別の研究題目として新たに採択されている。本研究成果をもとに、今後はその新たな研究に注力する予定である。

#### 引用文献

- Bandura A. Self-Efficacy: The Exercise of Control. New York: Worth Publisher; 1997.
- Honicke, T., & Broadbent, J. (2016). The influence of academic self-efficacy on academic performance: A systematic review. *Educational Research Review*, 17, 63–84.
- Margolis, H., & McCabe, P. P. (2006). Improving Self-Efficacy and Motivation: What to Do, What to Say. *Intervention in School and Clinic*, 41, 218-227.
- Putwain D, Sander P, Larkin D. Academic self-efficacy in study-related skills and behaviours: relations with learning-related emotions and academic success. *Br J Educ Psychol*. 2013;83(4):633–50.
- Robbins, S. B., Le, H., Davis, D., Lauver, K., Langley, R., & Carlstrom, A. (2004). Do psychosocial and study skill factors predict college outcomes? A Meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 130(2), 261–288.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Satoru Yokoyama	4. 巻 14
2. 論文標題 The Relationship between Interest in Learning Materials and Learning Motivation and Self-Efficacy in Higher Education Blended Foreign Language Learning Settings	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CONFERENCE PROCEEDINGS 14th International Conference Innovation in Language Learning	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Yokoyama	4. 巻 13
2. 論文標題 No Gender Difference Exists in Academic Self-Efficacy Improvement for Higher Education Blended Foreign Language Learning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Innovation in Language Learning	6. 最初と最後の頁 27 - 30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山悟、宮本裕生	4. 巻 13
2. 論文標題 高等教育における語学教育へのe-learning導入効果の検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉科学大学紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Yokoyama	4. 巻 9
2. 論文標題 Academic Self-Efficacy and Academic Performance in Online Learning: A Mini Review	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 2794
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2018.02794	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Yokoyama	4. 巻 4
2. 論文標題 Effect of Academic Self-Efficacy on Academic Achievement of Online Foreign Language Learning: A Preliminary Cross-Sectional Study in Japanese Higher Education Environment	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Innovation in Language Learning	6. 最初と最後の頁 3495
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Satoru Yokoyama
2. 発表標題 The Relationship between Interest in Learning Materials and Learning Motivation and Self-Efficacy in Higher Education Blended Foreign Language Learning Settings
3. 学会等名 14th International Conference Innovation in Language Learning (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------